

インターネット利用環境実態調査 2021

生徒指導部 堀田 景子

本校では、2018 年より Classi を導入し、また、2019 年から BYOD (Bring Your Own Device) を試験的に始め、現在は生徒の個人情報端末を利用しながら授業やさまざまな学習活動を行っている。個人の情報端末を学習活動に利用することに伴い、2018 年度から継続して情報機器の利用実態調査を行ってきた。本年度より、情報機器の利用実態からその活用状況やインターネットの利用環境に注目し、内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」を基に調査を行った。

インターネットを利用している機器は、自分専用のスマートフォンの利用が 98.8%で最も多く、次いで、インターネット接続テレビが 36.6%、ゲーム機が 36.2%であった。スマートフォンの利用内容は、投稿やメッセージを交換するが 99.2%で最も多く、次いで動画を見るが 90.9%、音楽を聴くが 87.7%、検索するが 87.5%で多かった。スマートフォンの利用時間は、2 時間から 3 時間が 29.5%で最も多く、1 時間から 2 時間が 26.7%、3 時間から 4 時間が 18.1%であった。内閣府の調査と比較して本校生徒の特徴は、スマートフォンの利用時間が長くなく、長時間利用者が少ない点である。インターネットの危険性についての学習の機会が、学校（小・中・高）の講演会や配布資料が 84.3%、学校の授業が 70.2%で高く、多くの生徒が学校を通じて危険性等を学んでいる。また、危険性についてより知りたいと考えているテーマは、セキュリティに関する問題が 37.8%、プライバシー保護に関する問題が 29.6%、電子商取引に関する問題が 26.6%で他の項目より高く、これらの項目に不安があることもうかがえた。

また、オンライン授業および対面授業に関する質問では、対面授業になって良かったと思うことの上位には、クラスメイトと一緒に授業を受けている感じがするが最も高かった。一方オンライン授業の良かった点として回答している割合が高かったものは、進度が適切だが挙げられており、昨年度の休校期間中にも学習の停滞がないように工夫した成果があったのではないだろうか。

デジタルネイティブ世代の本校生徒は、インターネットを利用して様々な活動を行っており、特にスマートフォンは利用内容からも生活の一部となっている。一方で、その危険性や利用の仕方、セキュリティ面で不安に思っている生徒も少なくない。スマートフォンのソフト面、ハード面ともに変化のスピードが早く、これらの適切な情報を素早く収集し理解していかなければ、思わぬトラブルに遭う可能性もある。その点では本校でも現行の情報モラルやネットリテラシーの指導以外にも、セキュリティ、課金や商取引などの消費者教育という観点での指導必要となるだろう。また、本校では来年度の新入生から一人一台 iPad を所持して学習活動を行う予定である。今後は来年度の新入生がどのように iPad を利用していくのか、また学習活動を通しての課題は何かを含め、インターネットの利用環境実態調査を継続していきたい。

<キーワード> インターネット利用環境実態調査 情報機器 スマートフォン
オンライン授業

1 はじめに

本校では、2018年より Classi を導入し、また、2019年から BYOD (Bring Your Own Device) を試験的に始め、現在は生徒の個人情報端末を利用しながら授業を始めさまざまな学習活動を行っている。個人の情報端末を学習活動に利用することに伴い、2018年度から継続して情報機器の利用実態調査を行ってきた。本年度より、情報機器の利用実態からその活用状況やインターネットの利用環境に注目し、内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」を基に調査を行った。

2 調査概要

(1) 調査対象

対象者は第1学年120名、第2学年198名、第3学年191名の計509名である。

(2) 調査方法

時期は12月末とし、回答には約1週間の期限をもうけ、Classiのプラットフォーム上で行った。

(3) 調査項目

内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」¹⁾を元に質問項目を作成し、本校独自の質問項目も追加して実施した。調査結果を比較するために、インターネットの利用実態に関する質問項目は同じものとした。本校独自の質問は、Classiの利用、対面授業およびオンライン授業についての質問とした。

回答はすべて選択式とし、Classiのプラットフォーム上で行った。また、複数選択形式を原則とし、一部単一選択方式とした。

3 インターネット利用環境実態調査の主な結果

(1) 回答率

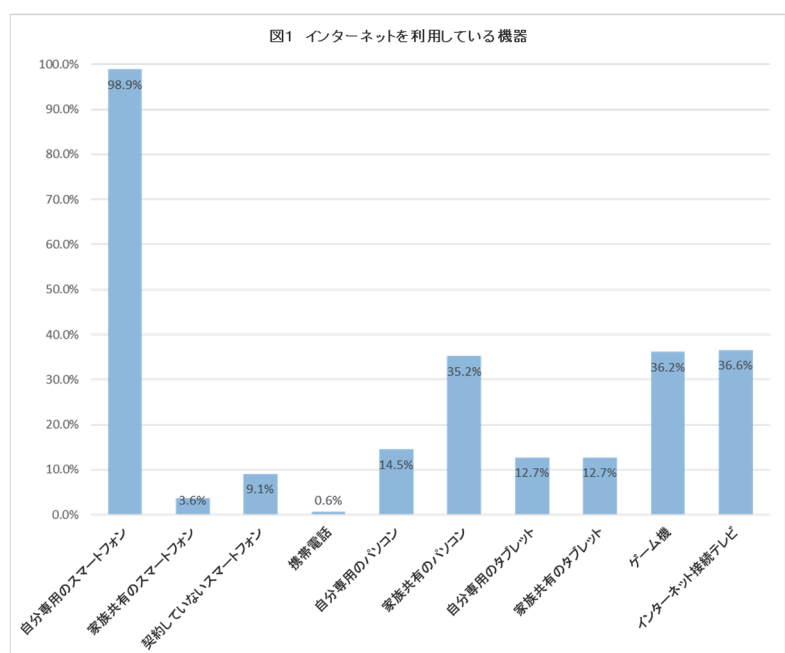
1年生118名、2年生198名、第3学年187名の計503名が回答した。回答率は98.8%であった。男女比は男子34.7%、女子64.3%であった。

(2) インターネットの接続および利用率

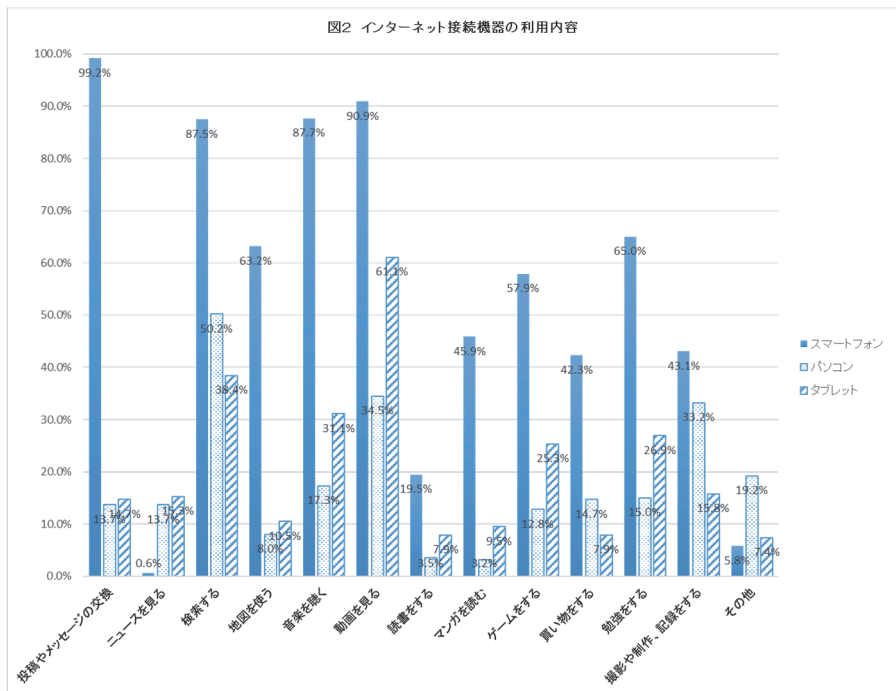
インターネットは99.4%の生徒が利用している。インターネットを利用している機器は、自分専用のスマートフォンの利用が98.8%で最も多く、次いでインターネット接続テレビが36.6%、ゲーム機が36.2%、家族と共有のパソコンが35.2%であった。

(3) インターネット接続機器の利用内容

スマートフォンの利用内容は、投稿やメッセージを交換するが99.2%で最も多く、次いで、動画を見るが90.9%、音楽を聴くが87.7%、検索す

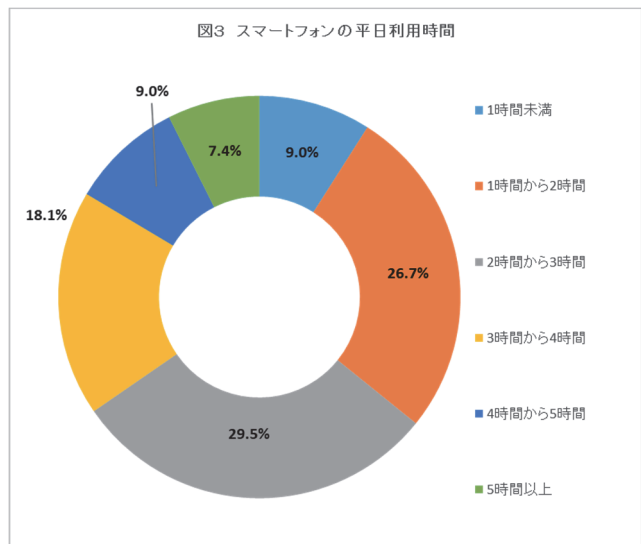


るが 87.5% で多かった。パソコンの利用内容は、検索をするが 50.2% で最も多く、撮影や制作、記録をするが 33.2%、勉強をするが 15.0%、買い物をするが 14.7% であった。タブレットの利用内容は、検索をするが 38.4%、音楽を聴くが 31.1%、勉強をするが 26.9%、ゲームをするが 25.3% であった。これらの結果は各情報機器ともに利用していると回答したものである。



(4) 各機器の平日の平均利用時間

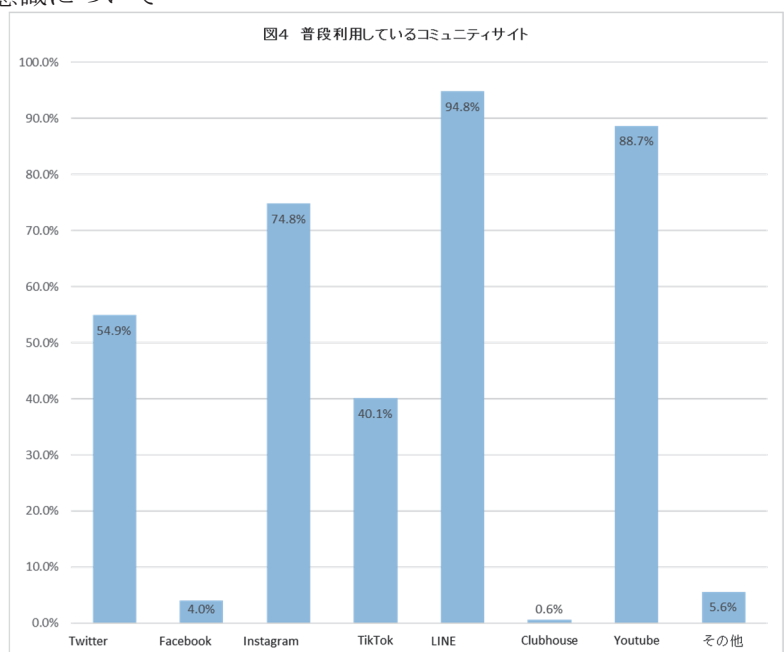
スマートフォンの利用時間は、2 時間から 3 時間が 29.5% で最も多く、1 時間から 2 時間が 26.7%、3 時間から 4 時間が 18.1% であった。パソコンは、1 時間未満 64.5% で最も多く、次いで 1 時間から 2 時間が 11.6% であった。タブレットも同様に、1 時間未満が 58.1% で最も多く、次いで 1 時間から 2 時間が 14.1% であった。インターネット接続テレビについては、1 時間未満が 46.3%、1 時間から 2 時間が 36.8% で多かった。



(5) 情報モラルやセキュリティーの意識について

悪口や嫌がらせのメッセージやメールを送られたり書き込みをされたことがあるのは 6.2% であった。また、他人が見ることができる SNS 等で自分の情報 (名前や写真、メールアドレス、ID) などを書き込んだことがあるのは 12.1%、一方他人の情報を書き込んだことがあるのは 5.6% であった。ゲームやアプリへの課金経験は 17.9% であった。迷惑メールやメッセージが送られてきた経験は 40.0% であった。

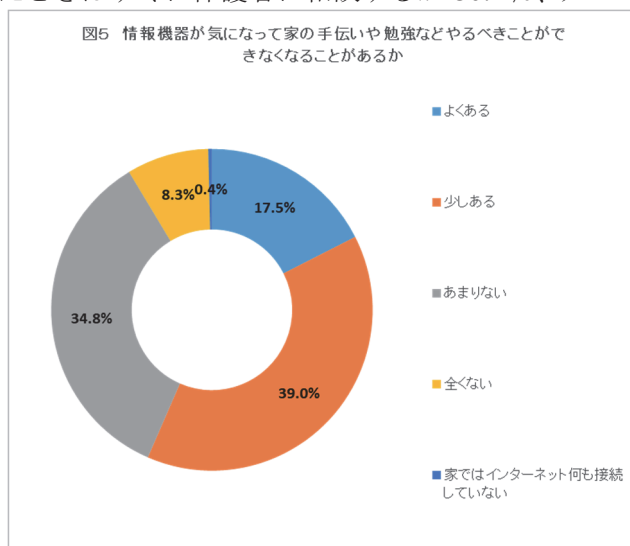
普段利用しているコミュニケーション



ョンサイト（SNS）は、LINE が 94.8%で最も多く、次いで Youtube が 88.7%、Instagrm が 74.8%であった。インターネットで知り合った人とのメッセージのやり取り（SNS も含む）の経験は 26.4%で、インターネットで知り合った人と直接会ったことがある経験は 9.4%、インターネットで知り合った人との人間関係で悩んだことがある経験は 2.2%であった。

インターネットの使い方について、家庭でのルールが決められているかについては、家庭でルールを決めていないが 36.2%で最も多く、次いで困ったときはすぐに保護者に相談するが 30.4%、ゲームやアプリの利用方法や利用料金、課金の上限が 28.2%であった。

スマートフォンなどを通じて友だちとのコミュニケーションを面倒だと感じることもあるかについては、よくあるが 7.7%、少しあるが 31.6%、あまりないが 38.4%、全くないが 11.9%であった。インターネット利用機器が気になって家の手伝いや勉強など、やるべきことができなくなることがあるかについては、よくあるが 19.3%、少しあるが 43.0%、あまりないが 27.6%、全くないが 9.1%であった。

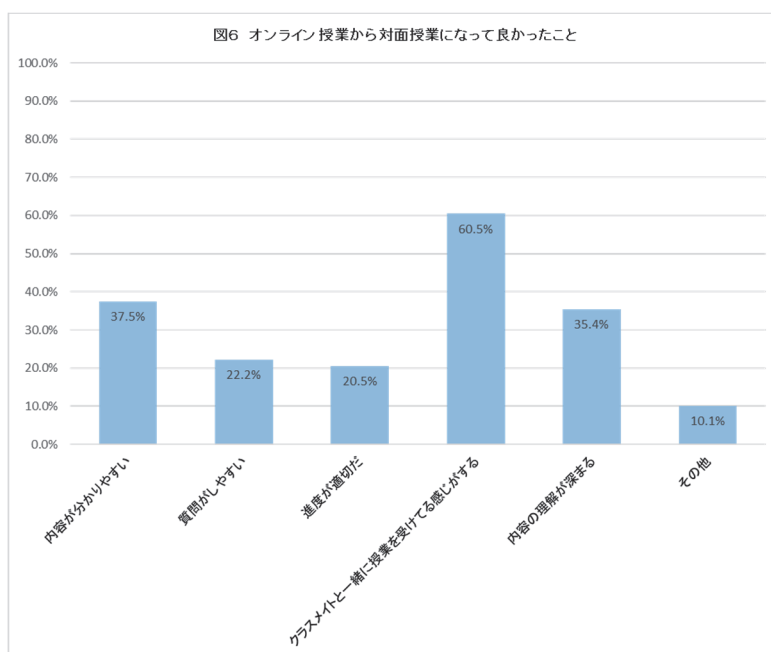


(6) インターネットの危険性の認知および学習の機会

インターネットの危険性についての学習の機会は、学校（小・中・高）の講演会や配布資料が 84.3%、学校の授業が 70.2%で高く、次いでインターネットが 23.1%、保護者が 20.3%であった。学習の内容は、インターネット上のコミュニケーションに関する問題（他人への悪意ある書き込み、言葉による攻撃など）が 75.9%、プライバシー保護に関する問題が 64.4%、児童の性的被害に関する問題（出会い系サイトや SNS 等がきっかけなど）が 60.4%であった。また、危険性について知りたいと考えているテーマは、セキュリティに関する問題（ウィルスや不正アクセス対策など）が 37.8%、プライバシー保護に関する問題（個人情報やパスワードの流出など）が 29.6%、電子商取引に関する問題（インターネットオークションや高額な課金など）が 26.6%であった。

(7) Classi について

Classi の利用頻度は、ほぼ毎日が 35.6%、週に 5 日程度が 28.0%、週に 2 日程度が 16.5%、ほとんど利用していないが 16.3%であった。Classi の中で利用しているメニューでは、学習記録が 66.4%、ポートフォリオが 56.5%、アンケートが 56.1%、成績カルテが 55.9%で高かった。



(8) 対面授業とオンライン授業について

オンライン授業から対面授業になって良かったと思うことは、クラス

メイトと一緒に授業を受けている感じがするが 60.5%で最も高く、次いで内容が分かりやすいが 37.5%、内容の理解が深まるが 35.4%、質問がしやすいが 22.2%であった。オンライン授業の良かったと思うことは、その他が 44.8%、進度が適切だが 30.7%で他の項目よりも高かった。

4 考察

インターネットの接続は 99.4%で内閣府の調査と大きな差は見られなかった。また、インターネットに接続する機器もスマートフォンが 98.8%であり、内閣府の調査²⁾と同様にほとんどの生徒がスマートフォンを利用している。スマートフォンの利用内容は、投稿やメッセージを交換するなどのコミュニケーションが 99.2%、動画を見るが 90.9%でこれらが多い傾向も内閣府の調査³⁾と同様であった。一方で、利用内容の傾向に違いが見られたのは、内閣府の調査ではゲームをするが 74.6%に対して本校の生徒は 57.9%で内閣府の調査と比較すると低い値であった。これは、ゲーム機の利用率が本校生徒の方が内閣府の調査より多く、ゲームはスマートフォンを利用せず据え置き型などのゲーム機を利用していることが要因ともいえる。さらに、パソコンの利用は自分および家族共有も含め 49.7%で約半数の生徒がパソコンも利用しており、内閣府の調査よりも利用率が高かった。昨年度までの情報機器利用実態調査でも、年々タブレット端末やパソコンの利用率が上昇し、31.7%であった⁴⁾。本校では、2018年から Classi を利用しての学習支援として、課題としてレポートを書いてデータで提出をしたり、ポートフォリオに学習の記録をデータで残す機会が多いことがパソコンの利用率を向上させている要因となっている可能性がある。また、これらインターネットに接続する情報機器を使う際の目的別にみると、勉強目的では1時間未満が6割を超え、2時間以内で9割を超えている。趣味や娯楽は1時間から2時間が35.5%で最も多いが、2時間から3時間も27.0%と一定数いる。保護者・友人とのコミュニケーションでは1時間未満が約7割となっている。また、勉強や保護者・友人とのコミュニケーションに3時間以上と回答した生徒はほとんどないが、趣味や娯楽に3時間以上利用していると回答した生徒は15.9%であり、インターネットに接続して趣味や娯楽に最も多くの時間を利用している傾向にあるといえる。そして、これらいずれの結果も内閣府の傾向と同様であった⁵⁾。

最も利用する情報機器であるスマートフォンの利用時間においては、2時間から3時間が29.5%、1時間から2時間が26.7%と3時間以内の生徒が半数以上となったが、内閣府の調査では、3時間から4時間が最も多く、3時間以上の利用は約6割となっている。これらから、本校の生徒はスマートフォンの利用時間が内閣府の調査に比べて少ない傾向にある。また、5時間以上の利用も内閣府の調査では22.3%である⁶⁾のに対し、本校では7.4%であったことからスマートフォンの長時間利用者も少ない傾向にあるといえる。その他の各インターネット接続機器においても、本校では1時間未満が最も多くなっており、スマートフォン以外の利用機器が多岐にわたっていたとしても、全体的にインターネットを利用している時間は少ない傾向にある。本校生徒のスマートフォンの利用時間が少ない傾向にあるのは、家庭でのルール項目からも推察できる。家庭でのルールとして利用時間を決めているのが内閣府の調査では50.8%に対して、本校では17.7%であったことから、利用時間を制限するまでの長時間利用をする生徒がもともと少ないといえるのではないだろうか。また、本校がある刈谷市では「刈谷市児童生徒健全育成愛護会」からの呼びかけで2014年からインターネットやスマートフォンの依存等を防ぐために、小、中学校の多くの家庭で9時以降はスマートフォンを使わないようにするなどスマートフォンの利用に一定のルールを設け家庭で守っていく取組を自主的な行っていたことにも関係している可能性も考えられる。家庭でのルールが地域社会の中で実効性のある取組となった⁷⁾ことや、刈谷市の中学校で毎年実施されている家庭での自主ルールに対する生徒の反応は8割が賛成で⁸⁾、生徒自身もその

危険性を感じているのではないかと考えられる。本校の生徒は刈谷市が通学圏内の者が多く、小、中学校でネット依存の危険性の認知や家庭での自主ルールなどによって、スマートフォンの利用時間に対しては高校入学までにある程度コントロールできるようになっている生徒が多いのではないだろうか。また、本校では BYOD を実施しているが、必要のない時はスマートフォンの電源は切りっぱなしにして授業を受けることが原則であるため、学校での時間にスマートフォンを利用する機会が授業以外にはないことも要因の一つだろう。

一方で、インターネットの危険性に関する知りたい学習のテーマとして上位に挙げられている項目は、生徒が知識や情報としてまだ不十分である、不安があるものと言える。上位に挙げられているセキュリティに関する問題、プライバシー保護に関する問題、電子商取引に関する問題については、今後学習や知識を得る機会を設定していく必要がある。特に成人年齢引き下げによって、高校3年生である18歳では未成年者取消権で保護されなくなるため、生徒に正しい知識や情報を提供していく必要性が急務といえる。

Classi の利用については、ほとんど毎日と週に5日以上を合わせると6割以上となり、昨年度とほぼ同様であるため、一定の定着はしているといえる。しかし、ほぼ毎日を含め週に5日以上利用している生徒が学年によって大きな差が見られた。学校全体の取組としては、Classi の利用目的や利用項目などは学年間で差がない方が望ましいと考える。また、ほぼ毎日を含め週に5日以上の利用が8割以上と最も高い2年生については昨年度、高校生活のスタートが休校から始まり、学校との連絡手段のほとんどがClassiであったことから、学年指導としてClassiを毎日入力し学校からの連絡を閲覧する指導がなされていたが、その習慣が定着してきていることが理由であろう。今後はClassiがあるから使わなければならないではなく、何のためにどの機能を使うのかといった明確な目的を持たせ利用させていく必要があるだろう。

今回の調査では、昨年度のオンライン授業と対面授業について良かったと思う点は何かを追加項目として2、3年生を対象に実施した。オンライン授業から対面授業になって良かったと思うことの上位には、クラスメイトと一緒に授業を受けている感じがするが60.5%、内容が分かりやすいが37.5%、内容の理解が深まるが35.4%であった。一方、オンライン授業の良かった点としては、進度が適切だが30.7%で良かった点として挙げている割合が対面授業よりも高かった。また、その他が44.8%で最も多く質問項目以外を良かったと評価している。昨年度の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、小、中、高等学校よりも休校期間が長かった大学で遠隔授業やオンライン授業が多く実施され、現在も一部オンライン授業のまま講義が行われている大学もある。そのため、大学のオンライン授業に関しては学生の反応も報告されており、オンライン授業の良かった点として、自分のペースで学習できるや自宅で学習できるが良かった点として挙げられている⁹⁾。本校では時間割を組んでオンライン授業を行ったため、自分のペースで学習できることはなかったかもしれないが、通学圏が遠い生徒にとっては、自宅で学習できることは本校の生徒も良かった点として考えているのかもしれない。また、特徴として進度が適切だと回答している割合が、オンライン授業の方が対面授業よりも高いことが挙げられる。これは、昨年度突然の休校措置により準備期間がない中で、各学年、各教科で教材や時間割、配信設定を準備し、休校期間中にも学習の停滞がないように試行錯誤をしながら工夫したことの成果であるといえるのではないだろうか。また、大学の報告ではオンライン授業に肯定的な意見も多く、オンライン授業の満足度が高い報告や学習効果を高める可能性を示唆する報告もある^{10) 11) 12)}。一方で、本校の調査結果からは対面授業になって良かった点として授業の内容が分かりやすくなったことや内容への理解度はオンライン授業よりも高い評価があり、学習という点で見れば本校の生徒にとって対面授業は重要な機会であ

るといえる。また、クラスメイトと授業を受けている一体感や質問のしやすさなど、コミュニケーションの部分においても評価が高かった。これらのことから、学習習慣や学習方法が確立されていなかったり、また専門的ではなく基礎的な学びが必要な年齢層ではオンライン授業よりも対面授業の方が様々な点でより学習成果をあげられるのではないだろうか。

5 まとめ

本年度から、愛知県が平成 28 年まで実施していた「情報機器利用実態調査」¹³⁾ に準ずるものから内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」に変更をしたため、単純に経年変化を比較することはできないが、多くの項目において変化の傾向をみることはできた。本校の生徒においても、スマートフォンの所持率がほぼ 100%に近い状態は数年間変わっていない。その利用内容においても多岐にわたり、デジタルネイティブ世代の本校生徒にとってスマートフォンはもはや生活の一部となっていることは間違いない。一方で、その危険性や利用の仕方、セキュリティ面で不安に思っている生徒も少なくない。スマートフォンのソフト面、ハード面ともに変化のスピードが早く、これらの適切な情報を素早く収集し理解していかなければ、思わぬトラブルに遭う可能性もある。その点では本校でも情報モラルやネットリテラシーの指導は継続しながら、セキュリティ、課金や商取引などの消費者教育という観点での指導も必要となるだろう。また、本校では来年度の新入生から一人一台 iPad を所持して学習活動を行う予定である。今後は来年度の新入生がどのように iPad を利用していくのか、また学習活動を通しての課題は何かを含め、インターネットの利用環境実態調査を継続していきたい。

昨年度の 4 月には一斉休校期間となって学校活動が止まり、学習面を始め目に見えるものだけでなく見えない部分でも子どもたちに様々な影響があった。現在も全校生徒が参加する学校行事には一定の人数制限を加えたり、終業式や始業式なども Zoom での実施など、新型コロナウイルス感染拡大前の状態に完全に戻っているものは多くない。しかし、この新型コロナウイルス感染症拡大の影響が教育現場にも大きな変革をもたらしていることは間違いない。急速な学習の ICT 化、オンライン化などは環境、設備、教材、人材など様々な面で問題や課題が浮き彫りになったが、この変化の方向性はより進んでいくと考える。新型コロナウイルス感染症拡大に関係なく、オンラインで学習ができるということは様々な学習方法でいつでもどこでも学べる環境となり、多様化やグローバル化の時代に沿っているのではないだろうか。一方で本校の調査でも対面授業の良さを実感している生徒も多くいることや、オンラインでは得られない経験や体験も対面授業にはある。学校という場がその両方の良さを提供する場となっていくことがこれから求められていくのだろう。また、新学習指要領では、予測が困難な時代に自ら新たな価値を創造していくことが子どもたちの未来に向けての方向性として示されている¹⁴⁾。今後も AI や VR 技術などテクノロジーの進化はますます加速し、現在からは予測できないような社会が待っている。その流れの中で、学校現場が設備、技術、人材、教育方法の面で取り残されるようなことにならないようにしなければならないと考えている。

参考文献

- 1) 内閣府 令和 3 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査表
- 2) 内閣府 令和 2 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 19-29 2021
- 3) 内閣府 令和 2 年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 47-62 2021
- 4) 堀田景子 情報機器の利用実態調査 2020 -3 年間の調査を通して- 愛知教育大学附属高等学校研究紀要台 48 号 110 2021

- 5) 内閣府 令和2年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果94-98 2021
- 6) 内閣府 令和2年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果79 2021
- 7) 齋藤長行 インターネット青少年保護への行動経済学適用の可能性-携帯端末の適切利用普及に向けた組織的取り組みを題材にして- 2 行動経済学会 2019
- 8) 中日新聞 (くらしの中から考える) ネット利用のルール 2020.4.3
- 9) 京都ノートルダム女子大学 教務委員会 オンライン授業に関するアンケート(学生)結果概要報告 2020
- 10) 早稲田大学 オンライン授業に関する調査結果(2020年度春学期) 2020
- 11) 中村オンライン授業(オンデマンド型)における教育効果 東洋学園大学教職課程年報(3)1-14 2021
- 12) 文部科学省 今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 資料2-1 コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について 2022
- 13) 愛知県教育センター 児童生徒の情報機器利用実態調査
- 14) 文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会 資料7-2「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申案) 2021